

## 暦(こよみ)について

加藤 幸一

### 1. 暦とカレンダーの語源

#### ア. 暦の語源

「コヨミ」は昔は「カヨミ」と言ったのではないかという説がある。しかし確証はない。この説によると「日」は二日、三日、四日のように「カ」と古くは言った。それで日を教え読むことを「カヨミ」と呼びこれがなまって今日の「コヨミ」となったとしている。他にも異説があってまだよくわかっていない。

#### イ. カレンダーの語源

古代ローマでは一ヶ月は月が新月から三日月や満月を経て再び新月になるまでの期間とした。つまり新月の日はその月の一日である。そこで毎月一日(この日をカレンダーという)の新月の日に新月の日であることを鈴鐺を大音でふれまわって知らせたという。このように月始めにふれまわることを「カレンダー」と言った。これがさらに転じて今日のような暦の意味になったとされている。

### 2. 暦の知識は歴史の研究に欠かせない

#### ア. 西暦と旧暦のくいちがい

俳諧(俳句のこと)や方言学分野でも活躍したわが郷土のほこれる人物、越谷吾山の死んだ年月は天明7年12月17日で、享年として71歳である。

さて上の文で天明7年とは現行の西暦になおすと何年であろうか。天明元年(元年とは1年のこと)は西暦1781年に相当する。だから天明7年は天明元年から6年後だから6を加えて1787年である。よさそうであるが実はこの場合はまちがいである。答えは西暦1788年となる。なぜなら天明7年11月22日が西暦1787年12月31日だからである。月日まで考えておかないと大きなミスをする。

おかし。参考までに付け加えておくと天明7年12月17日を現行の西暦になおすと1788年1月24日となる。また71歳は教文年であるからこのことを考えて逆算すると吾山の生まれた年は享保2年(1717年)となる。

### イ. 旧暦の月日と新暦の月日について

江戸時代の安政7年3月3日(桃の節句)の朝、大雪が降る雪景色の中を登城してきた大老井伊掃部頭直弼一行の行列が江戸城の桜田門にさしかかろうとした時、水戸浪士のテロ集団16名とその仲間に加わった薩摩藩士1名によっておそわれ大老は驚ぐるみに田楽刺しにされた事件は世に言う「桜田門外の変」である。

「あれ! 安政は6年しかないよ。次は万延元年だよ。」参考書などには安政7年はでてないかもしれない。しかし元号(年号)を安政から万延に改元したのは桜田門外の変の15日後、安政7年3月18日である。このような元号の改元を考えることによって考書・考文書を見やぶるのに役に立つともいわれている。例えばここに改元される前に書かれたとされている日記があるとしよう。この日記の日付は万延元年3月3日となっている。ほんとうに3月3日に書いたのなら安政7年となっているはずである。

### ウ. 旧暦の月日と季節

安政7年の桃の咲く3月3日や天明7年2月17日の頃の季節感を今の新暦の3月3日、12月17日と同一視してよいだろうか。いや(いけない)。月の満ち欠けを知るだけなら桜田門外の変が起きた3月3日の夜は月がみえれば三日月(☾)だったはずだとわかるし、また越谷吾山が死んだ12月17日の夜は15夜お月さん(満月)がすぎてやや欠けた「ばよい月」(☾)だったとわかる。このように日付からその日の月の満ち欠けがわかるのが旧暦(太陽暦)の長所である。しかし季節感には絶対にわからないのである。知ろうとするには当時の月日を。

現行の新暦(太陽暦)になおしてから始めてわかるものである。安政7年3月3日は1860年3月24日で、村Eの咲く頃にしては、たいへんぬずらしい大雪であった。

## 工. 旧暦の春夏秋冬と今日の春夏秋冬に対する取らえ方のずれ

旧暦の春は正月から始まる。夏は四・五・六月を、秋は七・八・九月を、冬は十・十一・十二月の頃を一般にさした。立春は春の始まりである。旧暦では正月の前半(たまには12月後半)にやってくるのである。現行の暦である新暦では2月4日頃とはっきりしている。2月4日はまだまだ寒い頃なのに春の始めだとはおかしいな。むしろ、最も寒い頃ではないか」と思われるかもしれない。しかし立春の日が寒さのさわまった時であればこそ、この日からそろそろ気温の上昇が期待され、そこに春が立つ気配を感じたのであろう。同様にして立夏は旧暦では四月前半、新暦では5月6日頃、この日から夏にはいり、日ましに気温が上昇し夏が立つ気配を感じる。立秋は旧暦では七月の前半、新暦では8月8日頃、秋の涼しさなど連想されないばかりか、むしろ暑さのさわまった時である。この日から以降は日毎に涼しくなっていく。秋が立つ気配である。立冬は旧暦では十月の前半、新暦では11月8日頃、来るべき冬の気配が感じとれるのであろう。

なお今日では、一般には新暦の3・4・5月頃が春、夏は6・7・8月頃、秋は9・10・11月頃、冬は12・1・2月頃をさしている。ゆえに2月4日の立春は今日ではまだ冬に属し、同様に立夏はまだ春、立秋はまだ夏、立冬はまだ秋に属する。次に、桜田門外の変を例にとりて考えてみよう。旧暦では3月3日であるからこれは当時では春の終りに近づいた頃である。この安政7年3月3日を新暦になおすと、西暦1860年3月24日となる。今日ではこの日は春の初めころと感ずるはずである。昔の人と今日の人とでは春夏秋冬の季節に対する取らえ方に大きなずれがあることを理解しよう。



### 3. 太陰暦

太陰とは月のことである。太陰は夜空に見られる巨大なカレンダーである。そのきわだった太陰の満ち欠けに周期性を発見することはたやすい。満月から再び満月まで、あるいは新月から再び新月まで約29.5日かかることは古代人でも容易にわかったにちがいない。この月の満ち欠け(これを朔望という)による暦が太陰暦である。

朔(新月)から朔(新月)、あるいは望(満月)から望(満月)までかかる期間を1朔望月という。約29.5日である。また1朔望月の12倍、12朔望月を1太陰年、つまり、これが太陰暦の1年である。

$1 \text{ 朔望月 (平均)} = 29.530589 \text{ 日 (29日12時間44分3秒)}$ $1 \text{ 太陰年} = 1 \text{ 朔望月} \times 12 = 354.3671 \text{ 日}$
--

これによれば「今日は朔(新月)だから一日」「今日は三日月だから三日」「今日は望(満月とか望月とか十五夜月ともいう)だから十五日」というように、たちどころに日付がわかる。太陰暦の1ヶ月は1朔望月が約29.5日であるから30日の月と29日の月とがある。30日の月を「大の月」、29日の月を「小の月」と言う。これら大の月六つと小の月六つとをうまく組み合わせればよいのである。

$\text{大の月} = 30 \text{ 日} \quad \text{小の月} = 29 \text{ 日}$ $\text{太陰暦の1年} = (30 \text{ 日} \times 6) + (29 \text{ 日} \times 6)$ $= 354 \text{ 日}$
---

しかしここで問題がでてくる。この太陰暦の1年はほんとうの1太陰年に対し、0.3671日の差がでてくる。この差は千りも積もれば山となるで例えば太陰暦の3年がたつと、約1日のずれがでてしまう。そこでこのようなずれをなくすための<sup>うるふとし</sup>閏年の考え方を取り入れるのである。

太陰暦の1年	平年 <sup>ひいねん</sup> は 354日
	閏年 <sup>うるふとし</sup> は 355日

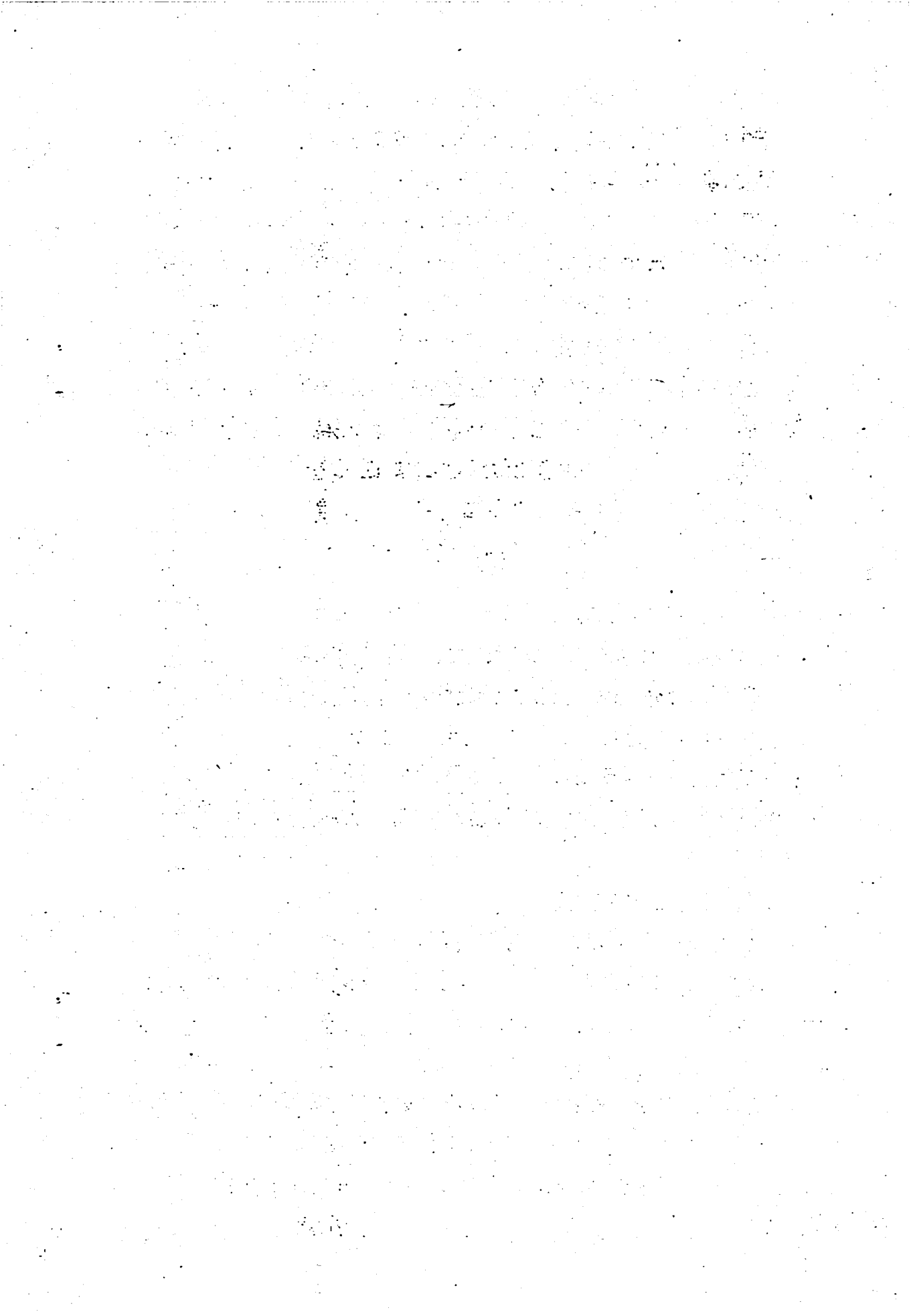
太陰暦の例としてイスラム暦<sup>いすらむれき</sup>があげられる。イスラム暦は現在使われている暦<sup>れき</sup>の中では世界唯一<sup>せかいゆい</sup>の純粋な太陰暦である。イスラム教の始祖<sup>しよそ</sup>モハメッドがメッカで<sup>はきい</sup>道書を受けてメジナに移住(これをハジラという)した西暦622年7月16日をイスラム暦の元年、紀元1年1月1日とした。1年は12ヶ月<sup>げつ</sup>で30日の大の月<sup>おほいづき</sup>と29日の小の月<sup>こいづき</sup>が交互に置かれ、30年の間に合わせて11回の閏年<sup>うるふとし</sup>がみられ、その閏年に指定された年の最終月<sup>さいしゅうげつ</sup>に閏日<sup>うるふひ</sup>が入る。

太陰暦は季節に全くそっていないため月と季節との関係は全く無関係となる。例えばイスラム暦の9月は<sup>ふし</sup>断食月として知られているが、<sup>まこと</sup>真冬になることも、またその約18年後には最もきびしい<sup>まこと</sup>難行となる真夏<sup>まなつ</sup>となることもある。

なお、イスラム暦1400年の元日は西暦1979年11月20日に相当する。((西暦622年+1400年後=西暦2022年))としてイスラム暦1400年は西暦2022年にあたるとかるはずみなことをしないこと。太陰暦と太陽暦では1年の長さが違う。太陰暦の方が年<sup>とし</sup>が約11日早く進むのである。

〔閏の語源〕閏の語源は、一説に中国で王が新月を告げる儀式において、1年が13ヶ月もある余分な月(つまりこれが閏月<sup>うるふつき</sup>である)の時は門の中<sup>かど</sup>にいて受けたことからという。

〔新月と日食〕日食<sup>にっしょく</sup>(月が太陽をおおい<sup>おほい</sup>かくす現象<sup>げんしょう</sup>)が起<sup>おこ</sup>るの



は新月の時に限るのである。これより日食が起こる日は旧暦では二日に限られることがわかる。これに関しての歴史上のエピソードを一つ紹介してみる

西暦1183年のこと、...平家軍と源氏軍との水島の海での海戦。世にいう「水島の合戦」があったがこの戦いのさなか日食があり、やみ夜のようになったため。(この日食は天文学者の計算によると太陽を全部おおう皆既日食と推定)日食とは知らない義仲軍は大混乱し、一方、都落ちで層になじんでいた平家軍の大將は日食を兵士に知らせて混乱を防いだという。この日は旧暦(太陰暦)になおすと、寿永2年閏10月1日であった。

#### 4. 太陽暦

太陽暦は太陰暦のように月の満ち欠けには全く関係なく太陽の動きをもとにしている。それゆえ季節にそっている暦といえる。

太陽暦の1年は春分点から翌年の春分点にまで戻ってくるまでの期間で約365日である。

$$1 \text{ 太陽年} = 365.2422 \text{ 日} \quad (\text{365日 5時間 48分 46秒})$$

現在われわれが使っている暦は太陽暦にもとづくグレゴリオ暦である。

〔現行の暦 グレゴリオ暦〕

グレゴリオ暦が用いられる前はユリウス暦である。ユリウス暦はエジプトにあつた太陽暦(恒星暦というべきかも)をもとにしてローマのユリウス=カエサル(シーザー)によって作られたといわれる。ユリウス暦は1582年10月4日まで長く使われた。ローマ法王グレゴリオ13世は1582年10月4日の次の日を10日間とぼして10月15日にして、この日からグレゴリオ暦を採用し、今日までいたっている。わが国では旧暦に対してこれを新暦ということがある

大の月は 31日.

1月・3月・5月・7月・8月・10月・12月

小の月は 30日、2月のみ 28日

2月・4月・6月・9月・11月

グレゴリオ暦の1年

平年 365日

閏年 366日

4の倍数年を閏年として、閏日を2月にいれる。ただし100の倍数年のうち400で割り切れない年に限り閏年とせず平年とする。例えば4の倍数年1980年、1984年、1988年、1992年...が閏年。1700年、1800年、1900年は平年で2000年は閏年となる。

グレゴリオ暦の1年は平均して365.2425日でこれは3000年で約1日の狂いしかないすぐれた暦といえる。

なお、小の月の覚え方は、「にしむく士」として、2月、4月、6月、9月、11月(士→士→11)となる。江戸時代の旧暦の大小暦に武士が日の出に背を向けて西に向いた絵の大小暦が作られたことがあるようである。この時の大小の並び方が今日の新暦の大小の並び方と一致していたので再び登場したのである。

### 〔世界暦〕

現行のグレゴリオ暦の欠点である各月の日数の不ぞろい(例えば30日、31日、それに2月の28日、また閏年には29日もある)と、毎年の日付と曜日との不一致を是正しようと考案されたのが世界暦である。イタリアの神父が考えだした暦は、1月は必ず日曜から始まり31日、2月は水曜からで30日、3月は金曜からで30日、4月は日曜からで31日、5月は水曜からで30日、6月は金曜からで30日というように三ヶ月ごとにこの並び



方をくりかえす。そして12月末に無曜日(日)の「世界日」を1日置きこの日は全世界が休日となる。閏年の時は、もう一つ「世界日」を6月の末に置く。

THE WORLD CALENDAR

JANUARY							FEBRUARY							MARCH						
S	M	T	W	T	F	S	S	M	T	W	T	F	S	S	M	T	W	T	F	S
1	2	3	4	5	6	7	5	6	7	8	9	10	11	3	4	5	6	7	8	9
8	9	10	11	12	13	14	12	13	14	15	16	17	18	10	11	12	13	14	15	16
15	16	17	18	19	20	21	19	20	21	22	23	24	25	17	18	19	20	21	22	23
22	23	24	25	26	27	28	26	27	28	29	30	24	25	26	27	28	29	30		
29	30	31																		

APRIL							MAY							JUNE						
S	M	T	W	T	F	S	S	M	T	W	T	F	S	S	M	T	W	T	F	S
1	2	3	4	5	6	7	5	6	7	8	9	10	11	3	4	5	6	7	8	9
8	9	10	11	12	13	14	12	13	14	15	16	17	18	10	11	12	13	14	15	16
15	16	17	18	19	20	21	19	20	21	22	23	24	25	17	18	19	20	21	22	23
22	23	24	25	26	27	28	26	27	28	29	30	24	25	26	27	28	29	30		
29	30	31																		

JULY							AUGUST							SEPTEMBER						
S	M	T	W	T	F	S	S	M	T	W	T	F	S	S	M	T	W	T	F	S
1	2	3	4	5	6	7	5	6	7	8	9	10	11	3	4	5	6	7	8	9
8	9	10	11	12	13	14	12	13	14	15	16	17	18	10	11	12	13	14	15	16
15	16	17	18	19	20	21	19	20	21	22	23	24	25	17	18	19	20	21	22	23
22	23	24	25	26	27	28	26	27	28	29	30	24	25	26	27	28	29	30		
29	30	31																		

OCTOBER							NOVEMBER							DECEMBER						
S	M	T	W	T	F	S	S	M	T	W	T	F	S	S	M	T	W	T	F	S
1	2	3	4	5	6	7	5	6	7	8	9	10	11	3	4	5	6	7	8	9
8	9	10	11	12	13	14	12	13	14	15	16	17	18	10	11	12	13	14	15	16
15	16	17	18	19	20	21	19	20	21	22	23	24	25	17	18	19	20	21	22	23
22	23	24	25	26	27	28	26	27	28	29	30	24	25	26	27	28	29	30		
29	30	31																		

W = World's Day 世界日

アメリカ合衆国のアケリス女史<sup>1</sup>は世界暦協会を設立し、改暦運動を収めよく進めた。結局<sup>2</sup>は国連での審議は審議無期延期となりうやむやとなつてしまった。1956年の頃のことである。その後、世界暦運動の熱はさめてしまい、今日にいた<sup>3</sup>っている。またいつか再熱<sup>4</sup>することがあるであろう。

なお、春分の日を1年のスタートとして1月1日にしようとする主張もある。これは生きとし生けるものが活動を始める春の中心であるため。

5. 太陰太陽暦、いわゆる旧暦について

太陰暦では1年の長さが季節の周期とあわないが月の満ち欠けを見て日がわかるのはこのうえなく便利である。そこで暦と季節の差がほぼ1ヶ月になったところでつまりその分だけ暦が早くなりすぎたところで一ヶ月分を足してやって季節とできるだけ合わせようとした。こうして1年が13ヶ月(うち1ヶ月が閏月)もある閏年が二・三年おきにみられるのである。これも太陰暦の一種である。この太陰暦は季節にそつた太陽暦のよい所をとり入れようと閏月を2・3年に1回入れ太陽暦の1年の長さに近づけようとした。これを太陰太陽暦と呼んでいる。

今日、わが国で旧暦とか陰暦、太陰暦と言つた場合、一般に明治の初め頃まで使用されていたこの太陰太陽暦をさす。

次に江戸時代の安政年間を例にあげるのでよく理解しよう。

「大の月」<sup>たいづき</sup>とは 30日まである月

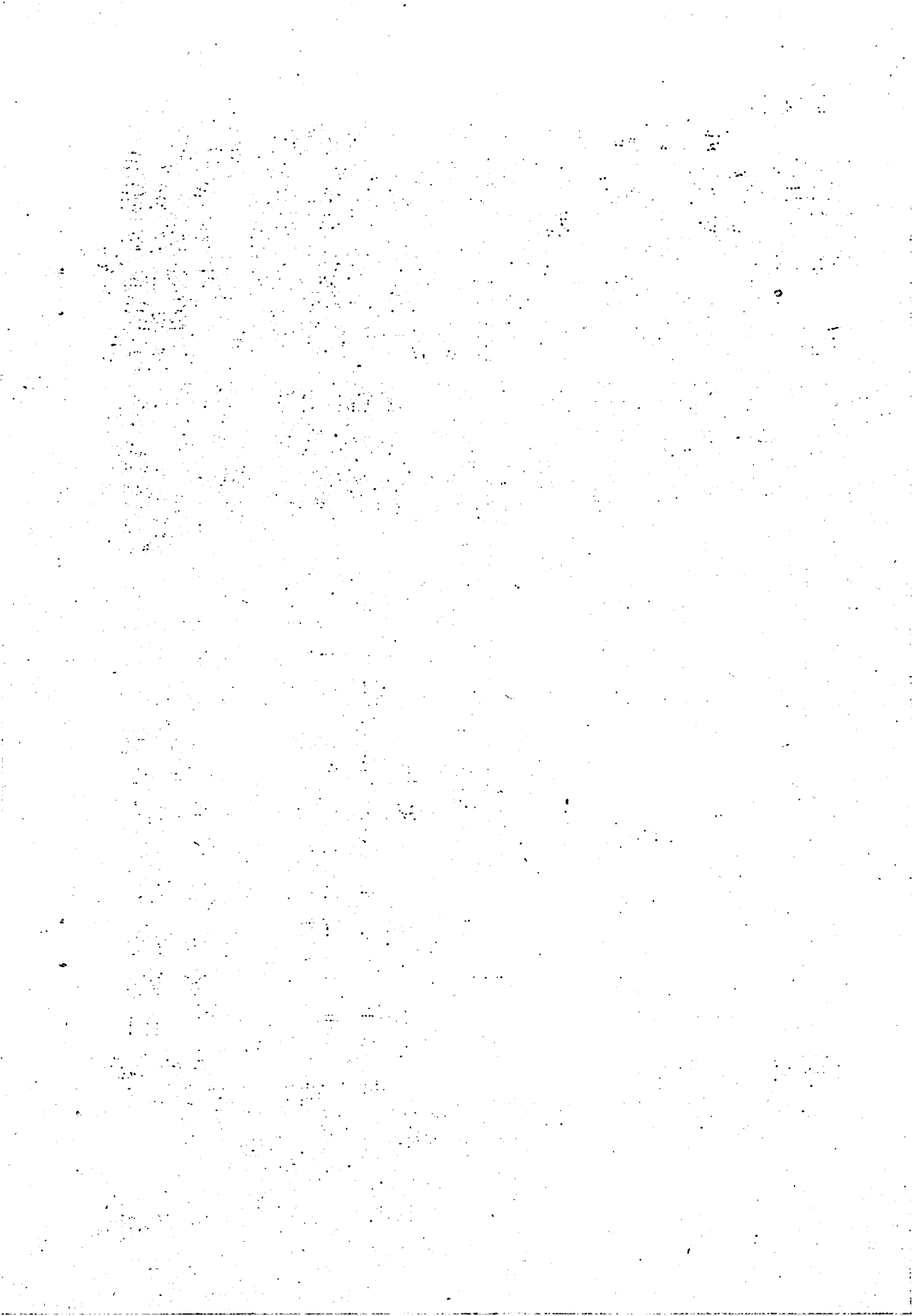
「小の月」<sup>しょうづき</sup>とは 29日まである月

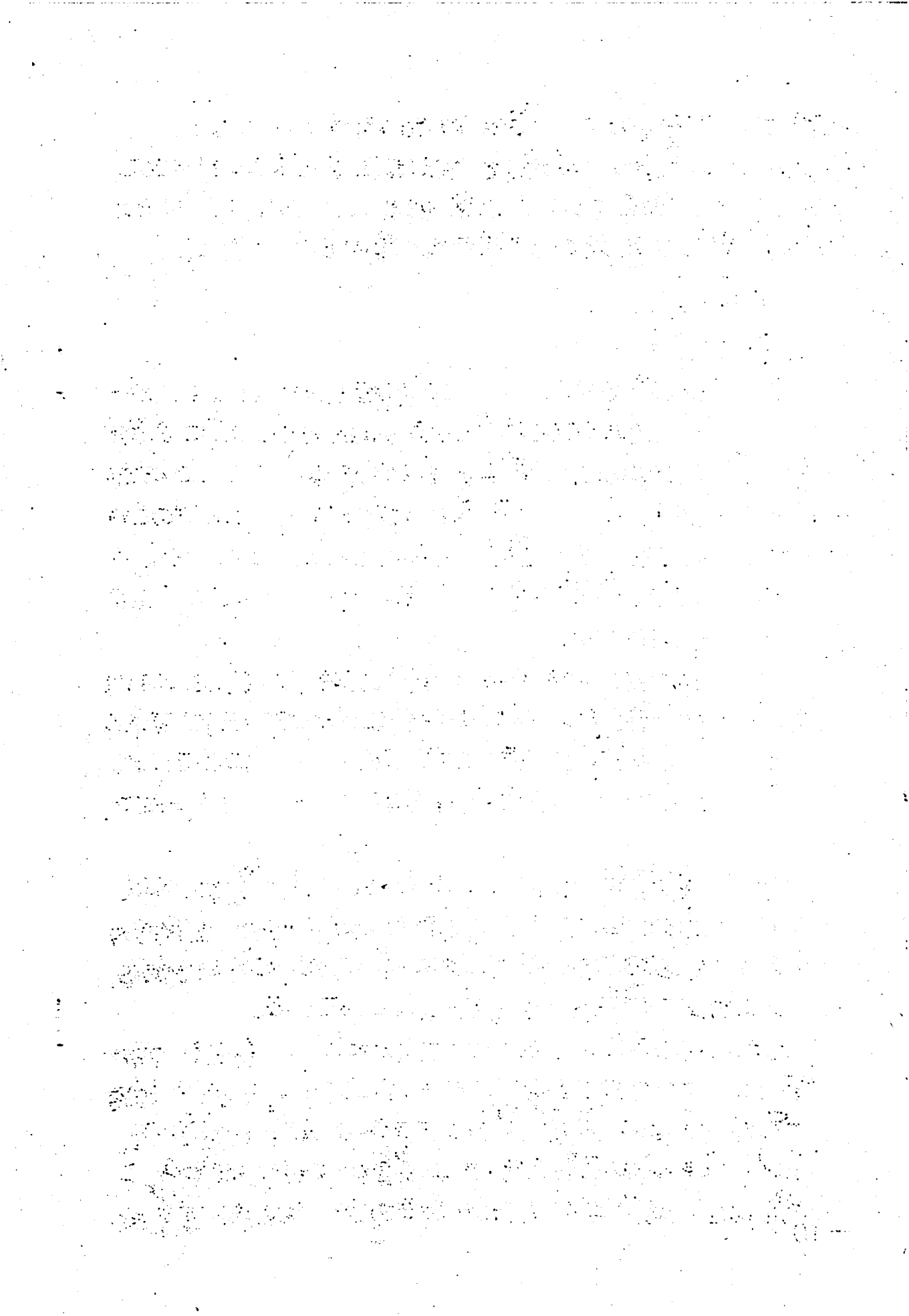
閏年のある年は「閏7月」というように閏月<sup>うるすづき</sup>がはいっている。

安政元年	安政2年	安政3年	安政4年	安政5年
1月 小の月	1月 小の月	1月 大の月	1月 小の月	1月 小
2月 大	2月 大	2月 小	2月 大	2月 大
3月 小	3月 小	3月 小	3月 小	3月 小
4月 大	4月 小	4月 大	4月 小	4月 小
5月 小	5月 大	5月 小	5月 大	5月 大
6月 大	6月 大	6月 大	閏5月 小	6月 小
7月 大	7月 小	7月 小	6月 大	7月 小
閏7月 小	8月 大	8月 大	7月 小	8月 大
8月 大	9月 大	9月 大	8月 大	9月 大
9月 小	10月 小	10月 大	9月 大	10月 小
10月 大	11月 大	11月 小	10月 小	11月 大
11月 小	12月 小	12月 大	11月 大	12月 大
12月 大			12月 大	

安政元年1月1日 (1854年1月29日)	安政2年1月1日 (1855年2月17日)	安政3年1月1日 (1856年2月6日)	安政4年1月1日 (1857年1月26日)	安政5年1月1日 (1858年2月14日)
月数 13ヶ月	月数 12ヶ月	月数 12ヶ月	月数 13ヶ月	月数 12ヶ月
日数 384日	日数 354日	日数 355日	日数 384日	日数 354日

- ・旧暦は1年の月数は12ヶ月、閏年で13ヶ月、日数は平年で353日、354日、355日、閏年で383日、384日、385日のどれかである。
- ・大小の並び方がそれぞれまちまちなのは1朔望月の長さの平均は29日12時間44分3秒であるが実際には長い時は29日20時間くらい、短い時は29日6時間くらいというように変化するのでこのことを考慮<sup>こうりつ</sup>して大小の配列をきめるからである。





- ・閏月は 二十四節気のうちの 中気を含まない月が閏月となる。  
(P18を参照)
- ・「安政」の前の元号は「嘉永」で 嘉永年間(1804-1820)は嘉永6年11月26日まで続き、そして翌日に元号を嘉永から安政に改元した。それゆえ11月26日以前は嘉永6年何月何日と言ってもよいのである。

## 6. わが国の暦の歴史

### ア. 旧暦の歴史

朝鮮半島の百済の国の僧、観勒が暦をわが国に持って来たのは推古天皇10年(602年)の時である。(なお、それ以前に欽明天皇15年(554年)に暦博士がわが国にやってきたとされている) それからしばらくして暦がわが国で使われ始めたのである。この時の暦が元嘉暦であったと推定されている。のちに文武天皇元年(697年)に元嘉暦をやめ、暦は儀鳳暦に統一されている。

なお、日本書紀にかかっている暦日のうち、初代天皇とされている神武天皇から西暦453年頃までの暦日はあたらさかのぼって推算されたもので、この計算の基準に利用した暦は、当時としては最新の儀鳳暦であったと考えられている。

その後、天徳暦・五紀暦とかわっていき、貞観4年(862年)にすぐれた暦である宣明暦が採用される。宣明暦はそれ以後823年もの長きにわたって使用されるのである。

以上の暦の伝承を漢暦五伝といっている。

しかし、800年以上もたてばすぐれた暦といえども2日の誤差がでてきたのである。江戸時代になるとようやく改暦の機運が高まり、渋川春海は天才的な頭脳を発揮して、日本人による最初の暦となった貞享暦を作ったのである。この暦は宣明暦以上にすぐれた物であった。その後、宝暦暦・

寛政暦・天保暦と改暦がつづいた。旧暦の最後となった天保暦は世界で施行された太陰太陽暦としては最高のものではないかと考えている学者もいる。

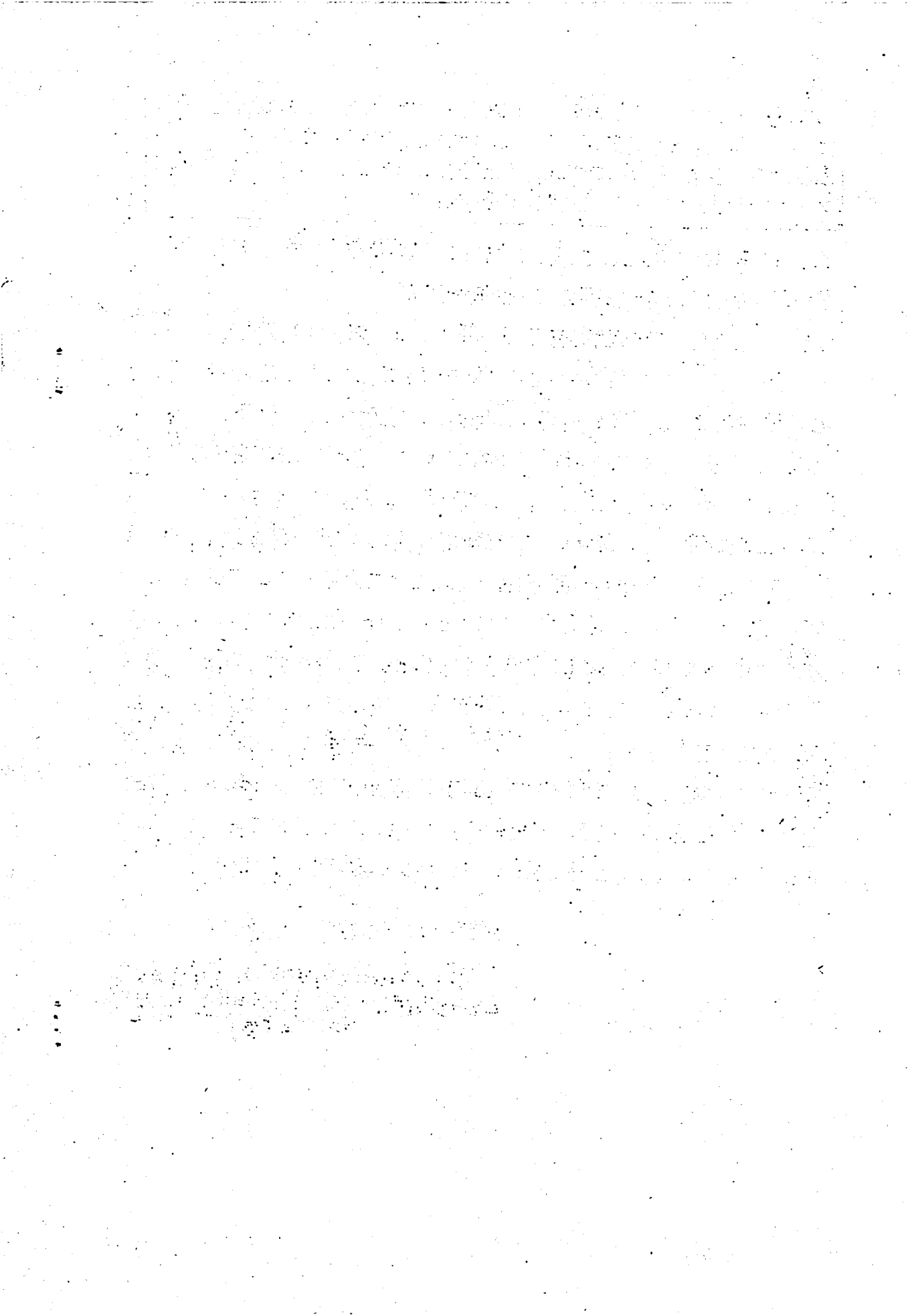
## イ. 新暦の誕生

明治にはいって明治政府は……それまでの太陰太陽暦(天保暦)をやめて太陽暦(グレゴリオ暦)を採用し、明治5年12月3日をもって明治6年1月1日とした。これ以降の暦を旧暦に対して新暦と言っている。この改暦の背景には西歐化ということもあるだろうがこの改暦のおかげで政府はお役人の12月の給料を払わなくて済んだししかも翌6年が旧暦のままだと閏年のため13ヶ月の年となるからこの1ヶ月分の給料も助かったのである。どうも新暦への改暦の理由は政府のソロバン勘定も大きく作用したようである。この時、多くの商人たちなどは大あわてしたようである。なぜならこの頃、大晦日は一年の決算日、その大晦日が12月2日となってしまったからお金を取り立てる方も払うほうも大変だからである。政府はこれをみかねて新暦の1月の晦日を大晦日に見たてるようにさせた。またこの時、福沢諭吉は改暦を反対している人たちなどに対して「日本国中の人民、此改暦を怪しむ人は必ず文盲(文字の読めない人)の馬鹿者なり。」云々と言っている。なおこの時多くの暦屋さんが倒産している。

## 7. 暦にまつわる迷信

宇治拾遺物語に次のような鎌倉時代の頃の話がのっている。

ある人のもとにしんまいの若い女房がいた。人に紙をもらって、若い坊主に仮名暦の筆字を頼んだ。おやうい御用と引き受けた坊主、はじめのうちは神事仏事によい日、凶日・大凶日などと書いていたが終りの方になって面倒くさくなり、食事をしてはいけな日、大いに食べてよい日など勝手なことを暦注として書きつけた。女房はおかしい暦だと思ったが理由のあることだろうと思って、その通



りに守っていくと天候をしてはいけない日というのが連続して出てきた。二日、三日と女房はがまんしていたが何とも耐えきれず手で尻をかかえ、「どうしよう、どうしよう」と身もたえしつづけ、ついに失神してしまった。

この話は笑い話として済ませない。なぜなら今日でも暦に關しての迷信が多く残っているからである。

新暦に改暦した明治政府は、暦にまつている迷信を一掃しようと、<sup>れきやう</sup>暦注には一切の迷信事項の掲載を禁止したのである。そしてその後、正式の暦は<sup>じんごうしやう</sup>神宮司庁だけしか出版されなくなる。しかし、戦後になると暦が自由化され、暦に再び迷信の記述が氾濫するのである。例えば<sup>ろくじやう</sup>六曜説がある。六曜は14世紀頃、中国から日本に伝えられたが江戸時代の暦には全く記載されていない。これを記した暦は新暦に改暦されてからのことである。旧暦の頃はしくみが見えすいていたので誰も相手にしなかった。本家の中国ではとくに忘れられている。これがわが国の現代人の中に浸透してしまったのである。このたった100年前から起った迷信「六曜」とは、先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口の事。暦にはこの順に日付に配列されているが30日か31日目にこの順番がずれる。このずれた日は旧暦でいう月のか変わった日である。すなわち新月の日である。

\*使用した主な図書・文献は

「歴史読本」臨時増刊 '73年12月号  
読売新聞 昭和53年1月4日～2月7日  
雑学教室「暦」